



エッセー集 『フランシスコ教皇をお迎えして』



上智大学カトリック・イエズス会センター

目次

巻頭言	3
カトリック・イエズス会センター長 李 聖一	
教皇フランシスコの上智大学への訪問について.....	4
ホアン・アイダル, S.J. (神学部教授、SJ ハウス院長)	
フランシスコ教皇をお迎えして.....	6
理工学部情報理工学科教授 高岡 詠子	
身を委ねて祈る、その姿に	8
博士前期課程 実践宗教学研究科 死生学専攻 2 年 黒須 優理菜	
教皇フランシスコの語る共通善への奉仕としての学問.....	10
博士前期課程神学研究科 神学専攻 1 年 松島 遥	
教皇フランシスコが遺していったもの	12
総合人間科学部教育学科 4 年 竹内 美祈	
教皇様来日ありがとう！	14
カトリック・イエズス会センター 長野 美喜子	
教皇様来日に感謝を込めて	16
カトリック・イエズス会センター 櫻 真由子	
私にとって、教皇フランシスコとの出会いは「一期一会」と言えます.....	18
ムカディ・イルンガ, S.J. (カトリック・イエズス会センター)	

巻頭言

カトリック・イエズス会センター長

李 聖一

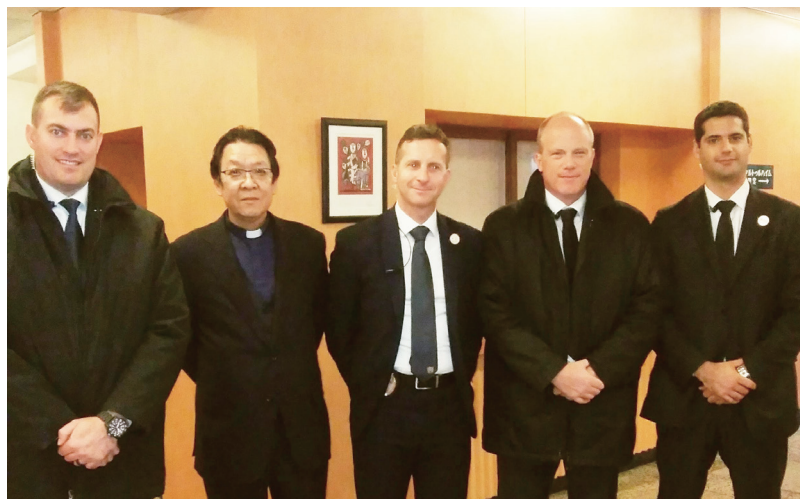
フランシスコ教皇来日を告げるポスターには、テーマである「すべてのいのちを守るため～PROTECT ALL LIFE～」とともに、「あなたに、話がある。」と書かれていました。文字通り、教皇は、長崎、広島、東京と、短時間の間に、限られた場所ではあったものの、多くの人々に語りかけられました。

日常生活の中で、突然、「あなたに、話がある。」と言われると、どうでしょうか。「なんの話か？」と、ドキッとして、いい話なのか、悪い話なのか、戸惑うことでしょう。教皇の語りかけにも、私たちは、最初はそうように反応したのではないのでしょうか。

そして、その話を聞きながら、人それぞれに、さまざまな思いを抱いたことでしょう。人生の転機と思った人、心に火を灯してくださったと感じた人、励まされた人、慰められた人、勇気をもらった人、・・・。

今回、カトリック・イエズス会センターは、フランシスコ教皇来日一周を記念して、そうした人々の思いを集めてみました。このデジタル版エッセー集をご覧になり、それぞれの思いを感じ取りながら、「あの時、私はこうだった」と思い返してもらえればいいと思います。そうすることで、教皇のメッセージが、その姿とともによみがえってきて、「今の私」にまた語りかけてくれるのではないのでしょうか。

私自身はと言えば、SJハウスでお会いし、朝食の場をともにし、握手し、その後は、上智大学でのメッセージを日本語にすることに努めました。「教皇さまは、遠くから眺める方が、ありがたみがある」という素朴な思いを抱きました。それと、教皇のSPの方々とともに写真を撮ったのがいい思い出です。「教皇さまをお守りする」という役割を果たしたいような気持ちになったからです。



教皇フランシスコの上智大学への訪問について

ホアン・アイダル, S.J. (神学部教授、SJハウス院長)



訪日前

2017年のはじめ、上智大学は教皇フランシスコにコンタクトを取り、上智大学生と教職員宛にメッセージを送っていただけたかお尋ねしました。また、実現は難しいと思っていましたが、学生との間で双方向のコミュニケーションを図ることが可能な“テレビ会議システム”の利用が理想であることもお伝えしました。そして、教皇フランシスコはテレビ会議システムを選択されました。教皇フランシスコは「とても日本には行けそうにないので、テレビ会議システムの利用が上智大学生に会う良い方法になると思います」と言われました。その結果、2017年12月18日(月)に上智大学生と教皇フランシスコとの間でテレビ会議システムを利用した『教皇フランシスコと話そう』が実現しました。

今回、教皇フランシスコが来日された際「私は来日されることは決してない」と思っていましたとお伝えしました。それに対し教皇フランシスコも「私もそう思っていました、神様のお考えは違ったのです」。私は教皇フランシスコの来日や本学に訪問されたことを考える時、常にこのことを念頭に置いておく必要があると思います。つまり、今回の教皇の来日は神様からの聖霊の働きでした。これは、多くの人々に恵みをもたらす訪問になることについて希望を持つためのもっとも重要な理由です。

私たちは聖霊の働きがどこで実を結ぶかを知るすべもありませんが、私たちの想像以上によりよく実を結ぶと確信することができます。

訪日

教皇フランシスコが来日し、本学に訪問されたことについて多くの意味があると言えますが、私は二つの点についてお伝えしたいと思います。

一つは、教皇フランシスコは常に周りの人に注意を払っていらっしゃるということです。彼はいつも周りを見ていらっしゃいます。人々に挨拶をするために立ち止まり、彼らに挨拶をする時は相手の目を見て、日本語で誰かが叫んでいると、何を言っているのか何をしたいのかと尋ねます。例えば、来校の際、ある学生のグループが、何かを渡したいと思っていることに気が付いたのも教皇様ご本人でした。それ

はたくさんの学生からのメッセージが書かれた旗でしたが、教皇様はそれを喜んでローマに持ってお帰りになりました。歩きながらでもいつも人々に目を配り、誰かが何かを必要としていないか常に見ておられました。これは教皇様が私たちに残してくださった美しい教えの一つです。

二つ目に私がお伝えしたいのは、彼の希望についてです。この希望は教皇フランシスコの喜び、ユーモア、言動に現れています。フランシスコ教皇にわずかなチャンスを与えたら、彼は冗談を言うでしょう。そして教皇様に話す機会を与えたら、きっと希望の言葉を述べるでしょう。教皇様は、世界は神様のみ手の中にあって、そのみ手の中からこぼれ落ちることはないと信じています。これは、私たちが住んでいる悲観的な社会に対する緊急的なメッセージなのです。

訪日後

メキシコ国籍のイエズス会員ミゲール・プロ神父は人々にキリスト教の教理を教えるのに日常生活の情景を使うことで有名でした。神様が私たちにお恵みをくださる方法について、彼は次のように話すことができました。

「それは流れ星のようだ」。ある人々は何か他のことに忙しくて星が流れ去ったことに気付きもしません。またある人は、その流れ星を見て「なんて美しいのだろう」と言って自分の仕事に戻り、そのことをすっかり忘れてしまいます。しかしある人は、この流れ星を心に留めることで彼らの人生は少しだけ美しくなり、彼らはその流れ星を見なかった人ともその美しさを共有することができます。

私は教皇フランシスコの訪問についても似たようなことが言えると思います。それは流れ星のようだったということです。私たちは教皇様の訪問が私たち一人ひとりに言うてくださったメッセージを深く考える必要があります。そして何よりも教皇様の訪問というこのお恵みが実を結ぶように求めることです。これは私たち一人ひとりが実践しなければならないことでもあります。

もし彼の話しの中から一つのメッセージを選ばなければならないとすれば、私たちが心に刻んで振り返り、行動に移すべきことは「貧しい人たちのことを忘れてはいけない」というメッセージです。

フランシスコ教皇をお迎えして

理工学部情報理工学科教授 高岡詠子

フランシスコ教皇さまが来日を決断されたのは、恣意的な教皇さまの望みではなく、祈りの中で、神の望みであると確信したからだという[1]。どこか行き詰まった雰囲気の漂う日本に、イエス・キリストが日本に教皇さまを遣わされて勇気を下さったのだとしか思えない。

教皇さまは、一貫して「核なき世界」と「貧しい人たちのことを忘れない」ことを強調しておられた。上智大学での講話でも、“現代世界において貧しい人や隅に追いやられた人とともに歩むこと”を強調された。それに加え、情報科学に携わる私の心に響いたのは、“見失わないでください。「真正な人間性は、閉じた扉の下からそっと入り込む霧のようにほとんど気づかれないながらも、新たな総合へと招きつつ、テクノロジー文化のただ中に住まっているようです。真正なものの粘り強い抵抗が生まれるのですから、いろいろなことがあったとしても、期待し続けることはできるのではないのでしょうか”（回勅ラウダート・シ112）[2]・・（1）

という言葉であった。これはラウダート・シ第3章のテクノロジーについての記述の一部である。この記述の前後から私にとって重要と思われる部分をまとめると、

— テクノロジーそのものは持続可能な社会を作るため、人間を傷つけたり制限したりする多くの害悪を取り除くことのできる、神様が与えてくださったものである。しかし、科学技術の発展に、人間の責任感、価値観、良心の成長を伴わせてこなかったために、現代の人間は権力を正しく用いるための教育を受けていない。そのため、核エネルギー、バイオテクノロジー、情報科学、DNAに関する知識などが、知識を持った人々、中でもそれらを利用する経済力のある人々に支配権を与え、私利私欲のために使われてきてしまった —

ということになると思う。その結果が、長崎、広島悲劇を生み、また、他方で貧富の差を大きくしたことにつながる。それでも、まだ希望はあると教皇さまは（1）を引用して私たちを力づけてくださったのだ。

情報科学の分野では、2045年に人工知能などの技術が、人間より賢い知能を生み出すことが可能となる技術的特異点を迎えると言われている。シンギュラリティと呼ばれるこの問題に関しては、①原理的に来ない②限定した形での実現つまり現実世界への介入は何らかの方法でブロックされる③現実世界への介入は一部あるかもしれないが、一様な実現はあり得ない。④全面的なシンギュラリティの実現

の4つの可能性があるとされている[3]。①を除けば、これはシンギュラリティを迎える人間の側の態度によって変わるのではないかと思う。コンピュータが人間を超えるというだけで恐怖を感じる人もいるようだが、そのような例はすでにたくさんある。蒸気機関、電気、インターネットの普及でそれらに

代わられた仕事はあったと思うが、人間はさらに人間らしいことを行うことができているだろう。シンギュラリティの実現により、癌をはじめあらゆる難病の治療法、安全なエネルギー源、貧困の解決が見込まれる。人間の能力を超える知能を作ることができるようになったとき、それを作るべきかという倫理的議論が必要で、人格や責任のあり方などが変わるかもしれない。そのためにも、私たちは、テクノロジーを、もっと健全で、より人間的で、より社会的で、より全人的な進歩のために役立てる、人々の具体的問題の解消のため、苦しみを少なくして生きるために本当の助けとなる（同112）



ために努力すべきであると感じている。

私たちは自分たちだけの力でそれを行うことは難しい。そのために、教皇さまに倣って、まず第一に祈ること、そして自分にできることを行動で示してゆきたい。教皇さまと握手をさせていただいたことは、神さまからの「勇気と寛大な心をもって出かけて行きなさい」というメッセージであったと思っている。

[1] 英 隆一朗、“教皇来日に当たって”、カトリック麹町教会「聖イグナチオ教会報MAGIS」No. 700, 2019

[2] 教皇フランシスコ、“ラウダート・シ”，カトリック中央協議会、2016

[3] 村上祐子、“シンギュラリティへの哲学的逡巡”、情報処理, 56(1), 情報処理学会、2015

身を委ねて祈る、その姿に

博士前期課程 実践宗教学研究科 死生学専攻 2 年

黒須 優理菜



「信仰を持っていなかったら、もう少し、楽に生きられたかもしれないのに」

多くの人の言葉や手、眼差しを通して感じる神さまの愛。自分は支えられて生きていると実感しながらも、幾度そんな風に考えたかわからない。

東京ドームミサには、カトリック障害者連絡協議会の車椅子誘導ボランティアとして参加した。何かしらの形で役に立てるなら、という気持ちと、ボランティア卒なら確実に現地でミサに与ることができるだろう、という打算。それから、青年たちの活動から距離を置く、という決心。その3つの理由から、私はその場に立っていた。

ミサから約1年前のこと、私は身体を壊して手術と入退院を繰り返した。復学してようやく学生生活の感覚を取り戻してきた頃には、すっかり諦め癖もついていた。それまでと

同じように主体的に活動に加わることは躊躇われ、関わっていたほとんどのコミュニティーから離れることにした。必然と教会からも足が遠退いてしまい、神さまとの向き合い方に戸惑った。

病いや障害や、何かしらの理由から困難な状況に身を置くことになった時、人間の視界は知らぬ間に遮られ、理不尽さの下に独りになってしまう。愛と赦しを願い、救いを望んで信じた神に依り頼むことを止め、薄暗い生を一人で歩もうとする。

キリストに倣うこと、より善く生きること。キリスト者が目指すべき在り方は明示されている。与えられた恵みに応えたい、報いたいとも思う。けれど、その姿を志そうにも、私の身体は思うようには動いてくれないし、あっという間に限界が来てしまう。感謝の気持ちと口を吐く恨み言、私の中には絶えず矛盾が渦巻いていた。何もできない私は生きていても良いのだろうかかと疑問が浮かぶ。キリスト者であろうとすればするほど、息が詰まっていくようだった。そんな私に、パパさまは「今のあなたのままで良い」と、そう示してくれた。

手を借りながらゆっくりと祭壇へ向かうパパさまの姿を鮮明に覚えている。その弱々しい足取りに衝撃を受けると同時に、私の頭はコンクラーベ後の最初の祝福のことを思い出していた。あの時、パパさまは「わたしのために祈ってください」と告げた。教皇に選出された人物が、祝福を与えるとともに深い感

謝を伝える。人々に身を委ねるその姿に強く惹かれた。そして今回、支えられながらミサを執り行う姿は私にその感動を思い起こさせ、改めて私の心を大きく揺さぶった。私にはその姿こそが福音だった。

説教で語られたように、私たちの生きている社会は利潤を追求する競争社会で、評価主義が蔓延している。この構造の果てに、他者に身を委ねることに対しての恐れにも似た不安が生まれているように思う。助けを求めることは、他者の負担になるし、迷惑をかけることでもある。困難の中にあっては、何かを成し遂げたり、同等の応答をすることが叶わない場合もある。その心苦しきは、抱えた困難そのものよりも、生への希望を失わせる。信仰を擲ってしまいたくなるのは、私自身がこの社会構造の下に己を裁いているからなのかもしれない。

けれど、パパさまはその姿と言葉を以て、誰しものが弱さを持っており、また、助けを願うことがゆるされているのだと、そして「キリスト者にとって、個々の人や状況を判断する唯一有効な基準は、神がご自分のすべての子どもたちに示しておられる、いつくしみという基準」であると、そう示してくれた。たとえ、歩けなくても、意思の疎通が難しくても、何かができなくても、何かになれなくても。私たちは生きていて良いのだ。

私たちは愛されている。生きることをゆるされている。

きっとこれからも、私は何度も困難にぶつかっては信仰に迷うのだろう。その度に、必ず立ち戻ることができるよう、パパさまの身を委ねて祈る姿を胸に刻んで生きていきたい。

教皇フランシスコの語る 共通善への奉仕としての学問

博士前期課程神学研究科 神学専攻 1 年

松島 遥



上智大学での教皇フランシスコの講演会は、まさに私がこれまで感じてきた息苦しさを言葉にしてくださったような印象を受けた。

2019 年 11 月 26 日上智大学で行われた講演会で教皇フランシスコは、「良質な大学での勉学は、ごく少数の人の特権とされるのではなく、公正と共通善に奉仕する者という自覚がそこに伴われるべきです。それは、各自が働くよう課された分野で、めいめいが果たす奉仕なのです」と語った。この言葉を受け、上智大学での学びは、社会の中で貧しくされた人、弱い立場に置かれた人に寄り添うという公正と共通善に奉仕するためであるということを再確認した。

教皇フランシスコは、東京ドームのミサで日本社会に対し、

家庭、学校、共同体は、一人ひとりが支え合い、また、他者を支える場であるべきなのに、利益と効率を追い求める過剰な競争によって、ますます損なわれています。多くの人が、当惑し不安を感じています。過剰な要求や、平和と安定を奪う数々の不安によって打ちのめされているのです。

と指摘した。日本社会に対し、過剰な競争という印象を抱いた経験は私自身も少なくない。高校時代は自分の価値がテストの点数や偏差値で決められているような感じがした。偏差値の上下で一喜一憂し、テストの点が悪いとクラスメートに笑われたり、反対にテストの点が良いと友人からも先生からも褒められたりした。おそらく日本で高校に通う多くの学生がこのような過剰な競争を伴う偏差値教育の現実に直面しているだろう。

上智大学はこの学歴偏重社会である日本社会の中で、比較的偏差値の高い私立学校に位置付けられる。上智大学は有名私立大学に数えられており、上智大学への入学を目標に偏差値をあげようと必死に受験勉強に取り組んでいる高校生も数多くいるだろう。講演会の聴衆である上智大学の学生自身の中にも、高校時代に偏差値教育を施され、そこで成功した経験や、あるいは目指した偏差値に届かなかった挫折の経験があるだろう。

この学歴偏重社会で上智大学に入学した学生は、ごく少数の特権者としてみなされるべきではなく、公正と共通善に奉仕する者だということが教皇のメッセージの主眼に据えられている。上智大学で、自分を特権的な者としてみなし、公正と共通善への奉仕に開かれないのであれば、この過剰な競争を伴う

偏差値教育と学歴偏重社会を変革することはできない。上智大学生も、社会と同じように偏差値教育と学歴偏重社会に迎合し、社会の構造的な悪に加担する存在となる。真の学問は常に善を志向している。善へ向かうはずの学問が一部の人の得られる特権として扱われ、社会の構造悪を生み出す要因になるならば、全人的な意味での人類の発展は見込めないだろう。上智大学での講演を聞いたあらゆる学生は、学歴偏重社会と偏差値教育の被害者であるとともに、これからさらなる過剰な競争を生み出す加害者になってしまうかもしれない。

大学での学びを「公正と共通善に奉仕するため」と捉える教皇フランシスコのメッセージは、大学だけではなく、日本のあらゆる学校にとって福音となる。一人一人の学生・生徒に対して「神から任された共通善へのふさわしい奉仕」を探す手助けをすることが偏差値教育に代わる新たな進路指導となりうるだろう。

教皇フランシスコが遺していったもの

総合人間科学部教育学科 4 年 竹内美祈



人生の中で、振り返ってみたときに初めて「きっとあの時がターニングポイントだった」と気づかされるような瞬間がある。その時は受けた恵みの大きさに、ただただ圧倒されてうまく咀嚼できない体験がある。教皇来日の出来事はきっと私たち一人ひとりにとってそのような体験だった。嵐のような熱狂と、教皇の残していったたくさんの言葉。そして何よりも私たちが忘れることのできないあの眼差し、差し伸べられた手、絶やされることのなかった笑顔。教皇は私たちに、自らの姿をもって、私たちが信じるキリストの姿を示してくれた。私たちは確かに良いものを見て、良いものに触発されたのだった。あの日々のことを、きっと私は一生忘れない。

教皇フランシスコの姿を目にするのは、これが初めての体験ではなかった。直近の2回のワールドユースデーでそれぞれ彼の姿を直接見て、その力強い言葉を聞いていた。彼の言動や思想は常にインターネットや書籍でいつでも目にするのができ、スマートフォンのケースにも彼の御絵を入れてどこへ行くときにも携帯していた。ですから日本に来ることも、そんなに大きな出来事ではないと思っていた。日本中は騒ぐかもしれないけれど、すでに彼を知る私たちにとっては大きな問題ではないことなのだ。しかし教皇に会いに行くことと、教皇が会いに来てくれることは、全く異なる体験であったのだと私は知るようになるのであった。

「教皇来日が日本社会にどのような影響を与えることを望むか？」教皇来日中に記者から受けたインタビューの質問に、うまく答えられない自分がいた。その日は11月24日で、実際に教皇が日本にいて長崎でミサを挙げる様子を、インターネット中継を通して見た直後のことだった。教皇に望むことなんてもうなかった。日本に来てくれたという事実がただただ有り難く、胸がいっぱいになっていた。望むことはない、これだけで十分なのだとは私は答えた。そのとき私は初めて、教皇が来てくれることの本質的な意味を知ったのだった。何かを変えてくれるから意味があるのではない。何かの主張を代弁してくれるから意義深いのではない。ただ「あなたたちを忘れていない」という、今や肉体を持たないキリストのメッセージを、彼の代理として目に見える形で示してくれているのだと、そしてそれこそが、私たちが心の奥深くで最も強く望むものであったのだと、はっきりと悟ったのだった。





翌25日には東京で挙げられた教皇ミサに与ることができた。あの日の光景を表現し尽くせるだけの言葉を私は持ち合わせていない。東京ドームを埋め尽くす人の波と、人々の間に流れる不思議な穏やかさ。私たちはあの場所で確かに、聖霊の大きな力が働いているのを見たのだった。

いつの時代も、どこの国に暮らしていても、信仰をもって生きることは、人生を賭けた行いだと言えるだろう。信条の自由が保障されているこの日本社会でも、身を守ることを覚える前に、自らの信仰のために他人からの攻撃や排除に直面させられた体験を持つ青年信徒の仲間は数多くいる。海外でも、日本人のキリスト者というのはなかなか理解してもらえない。日本に住むキリスト者のため、そしてそれだけでなくこの地で排除されているすべての人のために、教皇フランシスコは来た。どんなに社会が忘れようとも、無視しようとも、神は忘れてはいないのだと、彼は自らの行動をもって示してくれた。

この体験は見えなくても少しずつ、だけど確実に、私たちの生活を変えていく。日本社会を変えていく。私たちの心を、もう二度と以前のようにには戻れないほど大きく、あたたかく変えていく。私たちは今まさに、静かなる激動の中にいるのである。



教皇様来日ありがとう！

カトリック・イエズス会センター 長野 美喜子



38年前、聖ヨハネ・パウロ二世教皇様が来日されました。当時私はカトリック系の中学校に通っており、学校が後樂園球場で行われるミサの入場券を確保してくれましたので、必ず行けるものと思っていました。神様のいたずらか、来日1週間前に姉が水疱瘡を罹患しました。私は出来る限り姉を避けながら生活していましたが、見事に1週間の潜伏期間を経て発症してしまいました。その一方で、姉は回復し、後樂園球場でのミサにあずかることが出来たのです。たいへん寒くて辛かったと後から言われましたが、残念でなりませんでした。それから待つこと約40年、念願が叶ってよう

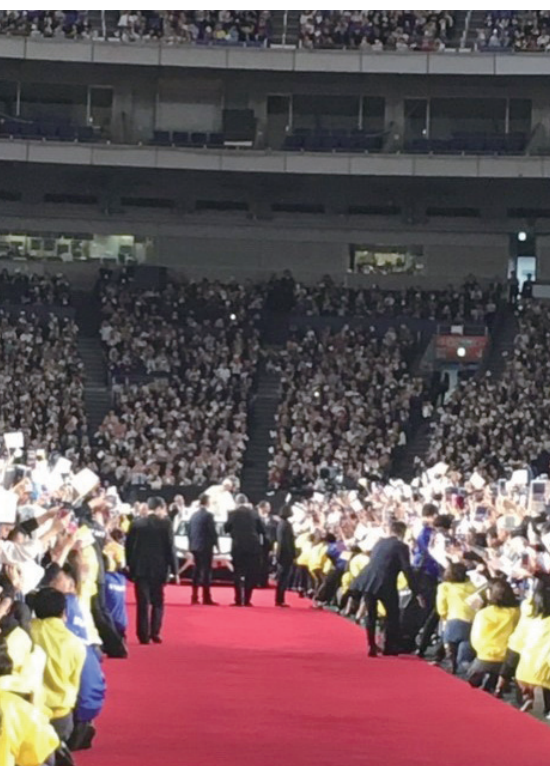
やくパパ様にお会いすることが出来、心から喜び感謝しました。何不自由のない家庭に育った私は十代のころ、弱い立場の人のために祈らなければならないという感覚は身についていませんでした。38年前に行けていたとしても、具体的に何をお祈りしたらよいのか分からなかったかもしれません。そのことを神様はよくご存じだったのでしょう。

さて、私には障害児の姪がいます。鼠年で今年12歳になりますが、見た目は1歳児です。原因不明の障害で、歩くことと話すことが不自由で、嚥下の障害もあります。義妹と義母に大切にされて、本人は不幸だと思ったことはない様子です。それが救いです。今回の来日にあたり、パパ様に姪のことを知らせたかったので、義妹が姪に代わってパパ様に手紙を書きました。来日された次の日の朝、二人は駐日ローマ教皇庁大使館の前で雨の中待ち続けましたが、とうとうお渡しすることは叶いませんでした。後日帰国後の大使館にお手紙を届けたそうです。数日後、大使様から代理のお返事がありました。義妹はやることはやったのでこれで良いと言いましたが、私はご本人にもうこの想いが届くことはないと思い、残念でしたが、これもまた神様のお計らいではないかと思えてきたのです。パパ様は姪も含めた弱い者すべての命を守ろうとしてくださっている！彼女もその中の一人に確実に入っていると思いました。そして、姪もさることながら、その子の世話を懸命にしている義妹、義母のためにも私は祈らなくてはならないと思いました。いつか、皆でルルドに行きたいという希望を持つようになりました。そんな気持ちにしてくださったのも今回の「すべてのいのちを守るため」というパパ様の来日テーマに他なりません。自分には本当に小さなことしかできないと思いますが、何か行動したいという気持ちが沸いてきて、何か出来そうな気にさせてしまうのが、パパ様のあの澄んだ瞳と屈託のない笑顔です。誰もが自然に幸せな気持ちになるなんてこんな素敵な方にお会いしたことはありません。

後日談になりますが、私は2020年3月に上智大学の巡礼でイタリアへ行く予定でしたが、急きょコロナウィルスの感染拡大のため中止となりました。私は、1975年に父が（母が言うところの奇跡的に）受洗したアッシジを訪ねることが目的の一つでした。パパ様も体調を崩されるなどイタリア中が騒然となりましたので、巡礼の中止は致し方ないと思い、パパ様がコロナウィルスに感染していないことを祈りました。これもまた私は見えない聖霊の働きに守られていることを感ぜずにはいられませんでした。あとから考えるとどれもこれもつじつまが合うのです。私のこじつけかもしれませんが、〇〇できなかったという経験をしたとき、そこに神様のご計画があるのではないかとじっくり考えてみるのは決して無駄なことではないと思います。上智大学でパパ様のご講演をされたとき、私は抽選に外れてしまいました。そのこともきつとなにか意味のあることだろうとこれから考えてみるつもりです。フランシスコ教皇様が、バチカンに会いに来るよりも自国の貧しい人のために働く（お金を使う）ようにご家族に言われたことと関係がありそうな気がします。

教皇様来日に感謝を込めて

カトリック・イエズス会センター 櫻 真由子



教皇様の東京ドームミサでの上智関係者へのボランティア募集は、ちょっとした閃きが始まりでした。10月に組織統合でカトリック・イエズス会センターが発足し、スタッフとして入ったコンゴからのイエズス会神学生のムカディさんがある日、「アイドル先生とも話していたのですが、せっかくセンターもリニューアルしたので、来月の教皇様来日の東京ドームミサで、上智の学生も手伝いをしているところを何かアピールできないか、と思うのです。でもそれには、カトリック中央協議会の誰かに話をしてみないといけない、と話していたのです。」と言ったのがきっかけでした。私はそれを聞いて、「ひとまず、ちょっと聞いてみますね。」と即答していました。教皇様の愛弟子のアイドル先生のご発案でもあったことが私を突き動かしていました。その後トントン拍子に話は進み、上智だけでなく、ほかのカトリック大学にも呼びかけましょうということになり、日本カトリック学校連合会とも協力して、広く募集しました。学生さんは授業があるから、あまり集まらないかもしれない、と当初話をされていた担当の方も、ボランティアの人だけで会場の手伝いを回そうと思います、と2次

募集も依頼されてきて、最終的には上智関係者だけで、約200人もの応募がありました。私は職員としても、卒業生としても、また信者としても、たくさんの応募があったことにただただ感激しました。思わず上智もまだまだ捨てたものではない、と思いました。上智大学がカトリック大学であることや、男子修道会のイエズス会を設立母体としていることが知られていなかったり、そもそもカトリックとは何？という学生も多く、キャンパスの中でも基督教に対して稀薄になっていると感じることも多かったので、関心の高さには感激しました。おそらく人生で二度とないこの貴重な奉仕の機会を提供できましたこと、感謝しかありません。

ロックスターとも呼ばれている教皇様とだけあって、アリーナにパパモビレで登場された時は、その圧倒的な存在感とオーラに東京ドームが一気に包まれました。「仏教のお坊さん方、ギリシャ正教やユダヤ教の方々、芸能人、死刑囚の方、ありとあらゆる方々がみな一堂に教皇様の名を叫び、お迎えする喜びに満たされていました。カトリック教会がいかに多様性（他宗教）に対して寛容であるかを体現していることだと思いました、キャンパス内でもハラルカフェや祈りの部屋があることなどでも感じる

ことができます。」と学生の感想にもあった通りです。教皇様が来日を決意されたのは神様のご意志からであった、とのことですので、ちょっとした閃きからとはいえ、提供できたと思っていたボランティアの機会も、すべて神様のご意志から私も動かされていたにすぎないのかも、と思います。カトリック大学であることが稀薄になっていたところへ、神様は教皇様をお遣わしになり、大学へ発破をかけに来てくださったようにも感じられました。このようなイエズス会ご出身の教皇様と今この時代を生きること、日本で唯一のカトリック総合大学に居ること、イエズス会員も少なくなっている中、協働者として働くこと、その意義を改めて認識していきたいと思いました。上智大学に関わるすべての人のご縁を紡いでいくだけで、日本も変わる、いや世界も変われると信じられる気がしています。教員の方からも、「歴代教皇の中でも希有な方が声をあげなければならない時代に生きているのだと思います。その場に、ただのお客としてではなく、奉仕するものとしておられたこと、うれしいです。」と、感想をいただいたことは今後のありがたい励みです。人智を超えるものに対する畏敬の念、強制でないその自然な気配、それを感じられる環境が大切だと思っています。

私にとって、教皇フランシスコとの出会いは 「一期一会」と言えます

ムカディ・イルンガ, S.J. (カトリック・イエズス会センター)



2019年11月に教皇フランシスコが来日され、26日に本学を訪問されました。教皇フランシスコの来校は、1981年の聖ヨハネ・パウロ二世教皇の来校以来、38年ぶりとなります。教皇の司牧訪問は訪れる人の立場によって意味が変わりますが、私のようなカトリック信者で、イエズス会員にとって教皇の司牧訪問は非常に恵み深い機会だと思います。一方、教皇の来日前後の国内の雰囲気を見ると教皇フランシスコは皆に愛されていると確信しました。教皇フランシスコに一目会いたい、教皇の写真を撮らせて欲しい、教皇にはありのままに話しをして欲しいという人々が、宗教、文化、国籍を超えて、沢山いました。日本における近親者兄弟姉妹は教皇フランシスコの言葉や、教え、書籍ばかりでなく、教皇フランシスコそのものが大好きだと言えます。

上智大学でも同様の状況であったし、上智大学に在籍している方々や、上智関係者などが教皇フランシスコを心待ちにしていました。こういう様子を見て、カトリック・イエズス会センターのスタッフと一緒に「教皇フランシスコ ようこそビデオ」という動画を作成することにしました。理事長をはじめとして上智大学関係者の協力のおかげで三十人以上が参加してくれました。「教皇フランシスコ ようこそビデオ」は26日に6号館101教室での教皇フランシスコの学校法人上智学院での講話の前に上映されました。これは、教皇フランシスコをお迎えする一つの準備でした。

教皇フランシスコとの出会いについて振り返ると、「一期一会」という言葉を思い出します。日本では「一期一会」という言葉がよく使われています。これは一生に一度だけの機会であり、あるいは生涯に一度限りの会という意味です。「生涯に一回しかないと考えて、そのことに専念する意」に違いないです¹。「一期一会」という言葉は昔から茶道の世界でよく使われています。茶道の心得を表している言葉で、どの茶会でも一生に一度のものと心得て、主客ともに誠意を尽くすべきことをいうとされています。「一期」というのは仏教の思想にとって、人が生まれてから死ぬまでの間の意味です。

イエズス会員として、そして上智大学の職員として、教皇フランシスコの来校に関する準備に何らか

¹ <https://dictionary.goo.ne.jp/word/一期一会/>

の形で関わることができました。一生に一度のことで、恵まれた機会でした。教皇フランシスコと一緒に朝のミサに与って、一緒に朝食をいただいたのが非常に感動的でした。そして上智大学の6号館101教室での教皇フランシスコの講話にも参加させていただきました。それゆえ、普段、テレビでしか見られない教皇フランシスコのシンプルな印象や、その影響の大きさ、笑顔の様子などを実際に目で見て、手で触れることができたのが感動的で、私の記憶に強く刻まれています。

私たちの人生の中ではあらゆる出会いは「一期一会」と言えます。私にとって、教皇フランシスコとの出会いは一つの「一期一会」そのものだと思います。なぜかという、教皇フランシスコの来日来校をきっかけに私たちの信仰が励まされ、日本におけるカトリック教会と信徒の皆さんが何を一番しなければならないかを考えさせる機会となったからです。すなわち、パパフランシスコは我々になすべきミッションの次のステップは何かを考える必要性を思い起こさせてくれました。



エッセー集『フランシスコ教皇をお迎えして』

上智学院カトリック・イエズス会センター
Sophia Catholic Jesuit Center
〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町 7-1
<https://www.sophia.ac.jp/>

制 作 株式会社リプラス
発 行 2020 年（令和 2 年）11 月 1 日
